

異世界マンガ作画大賞 課題作品 1 (男子向け)

◆概要

図書館でマンガを探している時、突然異世界召喚された男子高校生『塚原丹治』。召喚されて早々、地下牢に投獄されてしまう。しかも、周りの牢屋にいたのは過去に召喚された7人の自分自身(以下『俺』)だった。その『俺』が語ったのは、この世界がガチャシステムで勇者を召喚していること、そして、丹治のレアリティが星1の最弱であることだった。境遇に絶望する丹治に対して、『俺』が示したのは自分たち7人を捧げて強化する、すなわち「凸」をして丹治に未来を託すことで……!?

◆キャラクター設定

○塚原 丹治 (つかはら たんじ)

身長 170、年齢 18、普通の男子高校生、やせ形

特徴：一般男子高校生。異世界に召喚されたものの星1の最弱勇者として投獄されてしまう。ゲームが好きな男子高校生。基本的に温和な性格で、揉め事などは出来る限り避けたいと思っている。考えすぎる事がある。

○ヒカリ・レディエンス

身長 154、年齢 17、王国の姫かつ武闘家、黒髪ロングの前髪ぱっつん

特徴：王国の第3王女。まじめな性格で基本的に頭も良いが、脳筋のため力技で解決することが多い。あまり笑わないが、本人曰く、笑うのが下手なだけらしい。7人兄弟の末っ子で両親からの寵愛もあまりなかったため、1人が好きで他人にあまり関心が無い。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

※ここまでの展開

異世界にガチャとして召喚されたものの星1だったために投獄された主人公。
同じように投獄されていた過去の自分からこの世界の説明を受け、牢から脱出するための方法を伝えられる。

だがそれは、自らを犠牲にして強化する捨て身の手段、「凸」をすることだった。

丹治は悩んだものの、「凸」をして地下牢から脱出することを選択する。

脱出後、なぜか地下牢に連れてこられていた姫のヒカリを見つけ、助け出す所で…。

「それで、どういう状況なのか説明してくださいよ」

俺（編集部注：塚原丹治）は長い廊下を黙って歩く姫（編集部注：ヒカリ・レディエンス）に付いていきながら、姫に質問をする。

「ではまず、勇者召喚についてと世界選挙について説明します」

すると、姫は意外にも淡々と説明を始めた。

「勇者とはいわゆる魔王を倒すための存在ではなく、私達7人の王子の護衛兼広告塔として召喚されています。勇者、と呼ばれているのは昔の名残ですね」

王子の護衛？そんな事の為に異世界から召喚されたのか？それに広告塔って……

「我々7人の王子が次の国王となる為には、世界選挙と呼ばれる選挙に勝つために票を集めなければいけません」

「世界って……この世界に住んでいる全ての人に参加するって事ですか？」

「ええ。大国も小国も友好国も敵国も関係なく参加します」

「敵国もって……そんなの参加するわけないのでは？」

「強制的に参加させられるのです。あそこに見える、大樹『バロット』の力で」

姫が窓の外を指さすと、そこには雲にまで届きそうな大きな樹が見える。

「『バロット』を通じて全世界に投票用紙が配られ、そこに記載してある王子の名前のどれかに丸をつけるんです。無効票や白紙票などはなく、投票を拒否すれば死に至ると言われています」

「……そこで自分に投票してもらうために、王子は勇者を連れて旅をするって事か」

広告塔というのも理解できる。勇者が色々な問題を解決し、目立てば目立つほど一緒にいる王子の名前も売れる。そうすれば、自然と票が集まるってわけか。

それに、俺が捨てられた理由にも納得がいった。弱すぎると広告塔としても逆効果になりかねないから使い道に困るのだろう。

「そういう事です」

「でも、それならなんであなたはなんで地下に入れられてたんですか？同じ王子なんですよね？」

「本来なら、私も王子の1人として旅に出る予定でした。しかし、召喚された勇者の人数が足らず、私は旅に出られない事になりました。そこで少々暴れたため、地下に入れられることになったんです」

勇者召喚はガチャだと言っていた。次の勇者を呼ぼうにも、資金が底をついたってことか。

「ですが、運のよい事に私にはあなたがいた。これで私も出られます」

「でも俺は星1だから捨てられたんですよね？そんな俺がいても……」

「星が多いとなぜ強いと言われているのか知っていますか？」

「ステータスが高い、とかじゃないんですか？」

「そんなものは微々たる影響です。星が多いと強いと言われている理由は、星の数だけスキルを身に着ける事が出来るからです」

「星の数だけ、スキルを？」

「そしてあなたの言っていた、凸というシステム。私は聞いたことがありませんでしたが、どういう効果があるのか予想はつきます」

そう言うと、姫は自分の懐から1枚のカードを取り出した。

「これを自分のスキル画面に当ててみてください」

俺は言われた通りに、そのカードをスキル画面に押し当てる。

するとカードは消えて、先程までは何も書かれていなかったスキル画面に、『脚力上昇』というスキルが現れた。

「それはコモンスキルですからあまり強くありません。そのスキルをタッチしてみてください」

スキルをタッチすると、『このスキルを装備しますか？』という文言が現れた。はい、と押すとスキル名の横に星のマークが1つ付いた。

「ステータス画面に戻って下さい」

その言葉の通りにステータス画面に戻ると、俺の星の色が白から茶色に変わっていた。

さらに、凸の数を示す丸も城から茶色に変わっている。

「やはり、そうみたいですね」

「これは、どういう意味があるんですか？」

「それは、これから試してみましよう。彼らで」

姫が指さした先には大きな扉があり、その前に2人の兵士達が立っていた。こちらに気付いた兵士は、驚きの声を上げている。

「姫！？ それにあいつは地下に連れて行った筈の……なんでこんなところにいる！」

こちらを攻撃しようと、二人の兵士は腰に下がっている剣を抜く。

「私が右を。あなたは左をお願いします」

「は！？ む、無理ですよ。ただの学生ですよ俺！？」

「大丈夫です。思いっきり蹴り飛ばして下さい」

そう言うと、姫は両拳を握りしめて右の兵士の方へ勢いよく駆けて行ってしまった。俺が困惑していると、左の兵士が俺に斬りかかって来た。

「お前に式典の邪魔されるわけにはいかないんだよ！」

殺される！ そう考えた俺は咄嗟に蹴りを出していた。手ではなく足が出たのは、姫に言われた言葉のおかげだろう。

剣よりも一瞬だけ早く、俺の蹴りが当たった。その蹴りは兵士の鎧を歪ませ、兵士の骨を砕き――兵士を、扉の奥まで吹き飛ばした。

「……え？」

「やはり、予想通りですね」

姫の方を見ると、鎧がべこべこになった兵士が地に臥しており、その上に姫が立っていた。

「星というのは自分が身に付けられるスキルの数を表しているのですが、同じスキルを複数身に着けることは出来ません」

「そして凸とは、あなたの中に7人の自分がいる状態。つまり、1つのスキルを身に着ければその効果が自分を入れて8人分得られるという事みたいですね」

そこの計算式がどうなってるのかは分かりませんが、と続ける。

「星が2つ以上なら身に着けたスキル全部が8人分になるのか、それとも選択したスキルだけが8人分になるのか興味はありますが……今は関係ありませんね」

つまり、あの兵士を蹴った時に異常な力が出たのは、『脚力上昇』のスキルが8人分乗ったからで……って！！

「じゃあ適当に選んだスキルを覚えちゃダメなんじゃないですか！？俺は星1つしかないのに！」

「スキルはいつでも着脱可能です」

あ、そうなんですね。と心の中で安堵する俺。

「それにしても……派手に扉も吹き飛ばしてしまいましたし、どうせならもう入りましょうか」

そういえばこの吹き飛ばしてしまった扉は損害賠償とか請求されないんだろうか、と恐る恐る姫についていく。部屋の中は教会のような場所でかなりの広さがあり、そして……吹き飛ばされた扉で怪我をしている人を介抱しているところだった。

「……これ、俺は正式に捕まるのでは？」

「大丈夫です。邪魔をしたのは彼らであって、あなたは悪くありませんから」

本当かなあ、と不安になりつつも俺はただただ黙って後ろをついていくことしかできない。

「お父様。なぜ私抜きで式典を始めているのですか？」

姫のその言葉に、周囲の視線が一斉に姫へと集まる。特に驚いているのは彼女の父で

もある国王だ。

「ヒ、ヒカリ、お前がなんでここに……！それにその隣の者は！」

「はい。私専属の勇者様です。これで、旅に出る事を了承していただけますよね？」

その言葉に国王は、わなわたと肩を震わせる。

「お前、そんな弱っ……！！」

そんな弱い勇者を連れてどうするつもりだ！というような怒鳴り声を上げようとしたのであろう国王が、周囲を見て冷静になった。式典というだけあって、色々な人間がこの場には集まっている。そんな人々の前で、弱い勇者を召喚しました、なんて事が言えるはずもない。現に、国王のすぐ横にいる側近も国王の方を見てひたすら首を横に振っている。

「問題ありませんよね？では、私も旅に出させていただきます」

姫が一礼するのにならって、俺も頭を下げて出口へと向かっていく。国王はまだ何か言いたいことがありそうだったが、そんな事は無視して俺達は部屋を出た。

「では、妨害されても面倒なのですぐに旅に出ます。いいですね」

「いや、いいわけないでしょう！急展開すぎて、そもそも俺と一緒に旅についていくとは一言も……！」

「国王となった王子の専属勇者には特権があります」

「特権？」

「それは、この国で何不自由なく暮らしていくか、元の世界に帰るか選べる権利です。元の世界に帰る方法はこれ以外にありません」

姫はそう言うと、俺の方を振り返った。

「私についてくるか、ついてこないか、どっちにします？」

そんな事を言われては、俺はただただ黙ってついていくしかなかった。

これからもこの姫に振り回されそうな、嫌な予感を抱えながら。